研究評価に関する全国調査

鳥谷　真佐子（慶應義塾大学大学システムデザイン・マネジメント研究科　特任講師）

はじめに

本プロジェクト全体では、各大学の研究力を多視点から的確に把握するための研究評価指標に関する検討および新指標の開発を行った。研究分担者の個別プロジェクトとして、各大学がどのような研究評価指標を用いているのかという現状把握をするための調査を行ったので、その報告をしたい。

Ⅰ　調査の設計①―副題―

1　調査目的①‐①

本調査は、我が国の大学がどのような指標を用いて研究力の把握、すなわち研究評価を行っているかを知るために行った。

2　調査方法①‐②

- 調査対象：全国の大学院博士課程を有する国公私立大学を対象とした。

- 調査実施期間：2017 年 12 月 18 日～2018 年 1 月 19 日

- 調査事項：論文データを用いた定量的分析において、機関として重視する観点、研究者層の厚みを表す指標についての認識、論文等デー分析のため現在用いている指標、論文等デー分析のため将来的に使いたい指標、定量的研究力分析に関する懸念事項、以上についての現状調査および意識調査を行った。

- 標本数および有効回答数：385 校に調査票を送付。31 校から回答を得た。回答率 8.1%。

Ⅱ　調査結果②

1　調査対象属性②‐①

国立大学 76 校（12 校回答)
公立大学 42 校　(2 校回答)
私立大学 267 校 (17 校回答)

2　回答の集計結果② - ②

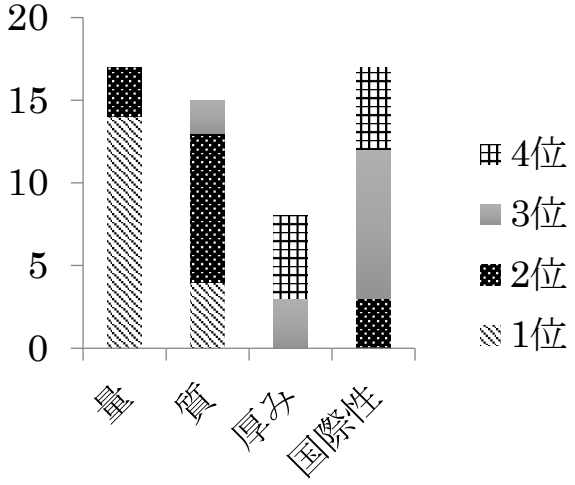

図１　論文データを用いた定量的分析において、機関として重視する観点

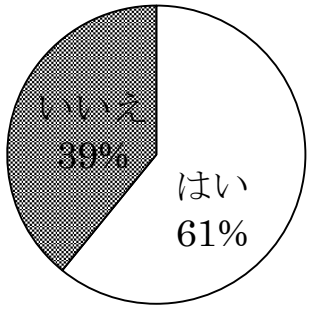

図２　研究者層の厚みを表す指標についての認識

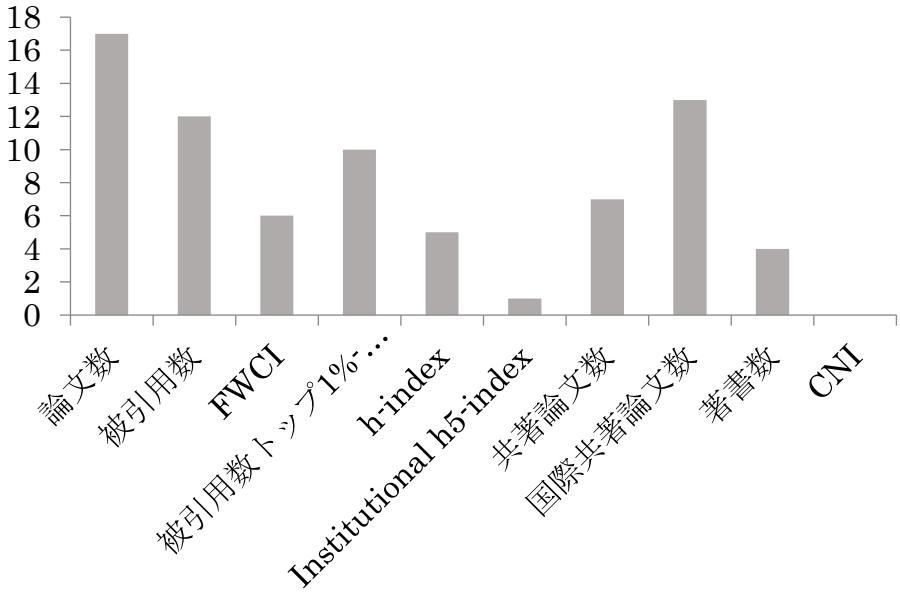

図 3 論文等データ分析のため現在用いている指標

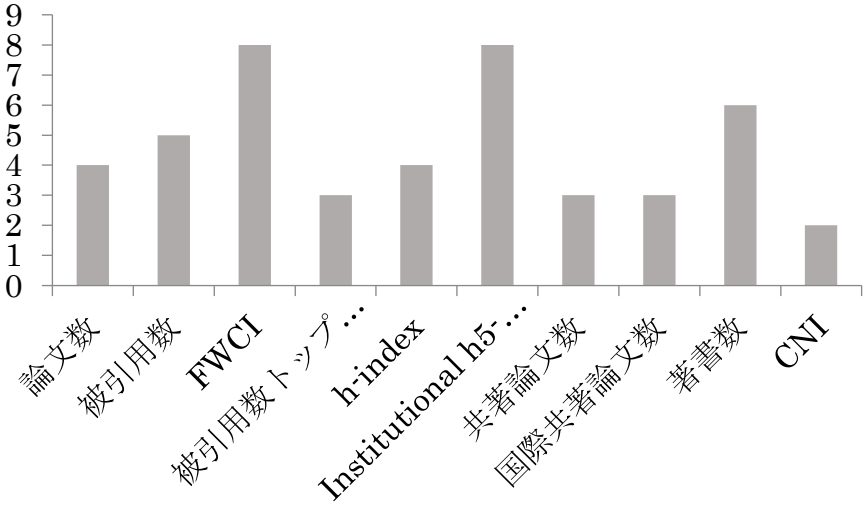

図４　論文等デー分析のため将来的に使いたい指標

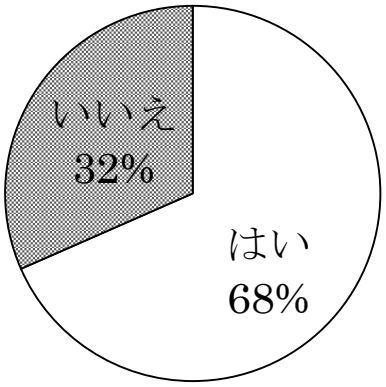

図５　定量的研究力分析に関する懸念事項の有無

- どんな懸念事項があるか。
  - 文系と理系など、学問分野の違いにより定量的には比較できない要素が多いこと。
  - 定量的な研究力分析によって、研究分野間の評価を行った場合、合理性があるのかが懸念である。
  - 分野により定量化できない、もしくは定量化による評価の偏り、学術分野の適切性について懸念がある。

- 分野ごとに論文に対する価値観が異なる。
- ・ピアレビューで補完するものという前置きをいれても、結局数字が独り歩きをする。誰にとってどのような意味がある研究なのかといった研究の「価値」が拾像される。
- 世界大学ランキングの単なる順位付のための指標として独り歩きすることが無いよう留意する必要があるではなかろうか。
- 指標について正しく理解されていない場合があり、誤った解釈がされたりする場合がある。
- 数字の持つ意味が正しく理解されるような周知・案内が必要（例えば機関に対する h-index は厚みを測るための興味深い指標だが、その数が機関論文全体の 2-3%にしかならない場合もある）
- 全国で統一的な基準および数値算出がなされる条件が整備されるか不安を感じる。
- 個人分析における名寄せの精度、日本語論文、著書への大手データベースへの反映が不十分なこと。
- 日本語論文の多い分野は海外のデータベースでは漏れが多く、不満が出てくる。
- 組織を強化するためには個人評価を皆が納得するものにしていかなければならない。
- 研究分析に対する学内アレルギー。
- 論文数を例に取ると、論文を多く有する研究者が研究力があると言い切れるのか、学内の組織的合意に至ってない。
- 実際の業務に従事する人的リソースの問題。
- 未踏科学領域や先端的・独創的な研究分野が評価できない。定量指標を重視しすぎるとそれらの研究領域に対するマインドが薄れる。
- 指標の適切性が問題。
- 我が国における研究力の評価指標の第一段階としては、誰もが応募可能でピアレビューの評価過程を経ている科研費を用いて行うのが望ましいと思料する。その先に現在検討されている論文データを用いた評価方法が補完的に存在するのが望ましいと思料する。

Ⅲ　考察③

1　研究評価で重視されている点③ - ①

調査結果から、論文データを用いた定量的分析において、各大学は量、質、国際性、厚みの順に重視していることがわかった。特に多いのは量であった。その理由は今回調査していないので、確かなことはわからない。

2　厚み指標についての認識③ - ②

- 本研究プロジェクトの成果である institutional h5-index の認識率は、回答の中で

は 61%であったことから、日本での認知度はそれなりに高まっていることがわかった。ただし、本調査へ回答した大学は、もともと研究評価への関心が高いというバイアスがかかっている可能性がある。

- 現在使用してはいないが、今後使用してみたい評価指標に関する調査では、FWCI に次いで institutional h5-index 2 番目に多い回答を得た。認知度に加え、その有用性についても期待が高まっていることが伺える。

3　定量的評価に関する懸念③- ③

- 研究分野間の評価がしにくい、分野によって定量評価の適性が異なる
- 数字が独り歩きする
- データ整備に対する不信・不満
- 組織内で定量的指標を用いることに対して合意を取るのが難しい、

などの懸念が挙げられた。これらのことから、定量的評価に関する技術的問題、利用者および分析対象者による理解不足が主に問題とされていると考えられる。

おわりに

今後は、研究評価指標をどのように各大学の研究戦略に結びつけていくのか、指標への正しい理解を促進するためにはどうしたらよいのかといった課題を検討していく必要があるだろう。

.

（とりや　まさこ）